

被災地の経験と教訓を語る 東北ナカヨ会 やはり電話はビジネスの生命線

東日本大震災のなかで、地場の通信系ディーラーはどういう経験をしたのか。自ら被災しながら、顧客企業の通信の復旧に力を尽くしたナカヨ電子サービス系「東北ナカヨ会」の3人の経営者に教訓を開いた。

文◎編集部



甚大な被害をもたらした東日本大震災の経験と教訓を語る、ティーエムエス会長の佐藤幸雄氏(左)、ビーアイテレコム・代表取締役の柴田武広氏(中)、コスモ通信システム代表取締役の高橋秀治氏(右)

司会 震災による被害は地域によって異なると思いますが、どういう状況だったのでしょうか。

高橋 車で盛岡市の事務所に戻る途中に地震に遭いましたが、電柱・電線が大揺れで尋常ではないと直感しました。盛岡の事務所は被害が比較的少なくて済みましたが、宮古市の新しい事務所は津波で流されてしまいました。

盛岡市内は2日目から電気と一部携帯電話が通じるようになり、それと同時にお客様から次々復旧の要請が入り、宮古の事務所の分も含めて、それに応える日々でした。

柴田 私は仙台市の隣の多賀城市で商談の最中でしたが、大地震でそれどころではなくなり、車で青葉区の

事務所に戻ることにしました。ところが仙台方向は大渋滞なので海に近い若林区の方に迂回しました。こちらも身動きが取れない渋滞でしたが、防災無線が津波警報を発し始めたので、携帯電話でワンセグを見るとすぐ傍の仙台空港が浸水する映像が映っていました。バックミラーを見ると沿岸の松の木を倒して津波が押し寄せる様子が見えたので、とっさに高台になっている東部道路の方にハンドルを切り替え必死で逃げました。やっとの思いでコンクリートの上に登り、下半身は津波に洗われましたが命だけ助かりました。何人かを助け上げましたが、救えなかった人も大勢いたのが心残りです。

2日後、青葉区の事務所に行くと、

建物は一部損壊でしたが避難所になっていました。3日目ようやく電気も電話も通じるようになりました。携帯電話はドコモが通じていましたが発信規制が掛かっている状態でした。

佐藤 私も車で仙台市の事務所に戻る途中でしたが、震度6強であちこちで建物がさしむ不気味な音が聞こえました。事務所は散乱しており手が付けられない状況でした。余震が続いていたので貴重品を車に持ち込んで過ごしました。

仙台市内も地域によって復旧が大分異なり、電気・電話が7日、水道が1ヶ月、ガスが45日と遅れました。お客様からは早く電話を使えるようにしてくれと矢の催促を受けましたが、インフラがダウンしているのでどうしようもありませんでした。岩手、青森などのお客様からはネットが繋がらないなど修理要請が沢山ありましたが、ガソリンがないので動けず悔しい思いをしました。

単独電話機で応急措置

司会 ユーザー企業の被害状況とその復旧支援はどう進めたのでしょうか。

高橋 これほどの津波の被害は初めての経験でした。久慈市のお客様からは1階が浸水したと連絡があり、すぐビジネスホンを取り替えてくれと要請があり、手持ちの中古機で対応